



晴着

—— エイチ、ヂー、ウエルズ ——

東京女子高等師範學校教授 津田芳雄

或所に小さい男の子がゐて、お母様から素敵な晴着を拵へてもらつた。それは緑色の地に金線の飾を着けたもので、織り方がまた優美さ云ひやうのない程手の込んだものであつた。それに頤アの下に結ばれるふはりミしたオレンヂ色のネックタイも附いて居り、ボタンがまた新しく、星のやうに光つてゐた。その子はこの着物が無暗に氣に入つて、得意に思つた。初めて着た時には姿見鏡の前に立つて、驚いたり、嬉しかつたりで、暫くは鏡から離れきれないのだつた。

その子はこの着物を何所へでも着て行つて、あらゆる人に見せたかつた。今まで自分が行つたこゝのある所いふ所、また人の話に聞いたこゝのある場所いふ場所は思ひ浮べてみて、今それらの場所へ、この光つた着物を着て行

くミしたらみんな氣持だらうなミ想つてみたりした。そして直ぐにもこの着物を着て牧場の長い草や暑い日光の中へ跳んで行きたいミ思つた。只この着物を着るために。

所がお母様が「いけません」ミ云つた。もうこんな綺麗な着物は出来ないから、ミても大事にしなければならぬミ云つた。お前はこれをいためないやうにして、お式の日がお祭の日にしか着てはいけない、お前の一番上等の着物なんだからミ云つた。さう云つてお母様はボタンの光が曇らないやうにミ一つくそれを薄葉紙に包んだり、袖口や肘アやその他着物のいたみさうな所へ小さい當を縫着けたりした。

その子はその事されるのは嫌だからよして下さいミ云つたけれど聴かれないのだから仕様がな。たうさうお母

様に説得されてしまつて、その美しい着物を脱いで、綺麗にたゞんで、しまつて置くことを承知した。けれどもその子は始終その着物のこみや、また、その着物に當を着けたり、ボタンを紙で包んだりしないで、本當な晴着の儘をちつきも氣にしないで着られる晴の場合のこまばかり考へてゐた。

或晩その子は、一つのボタンの包紙を取つてみるに光が少し曇つてゐた夢を見た。そして夢の中でそれを非常に悲しんで、そのボタンを何度も何度も磨くけれど、光りはせず却つて少し曇つてくるのだつた。そして目を醒ましてからも臥ながら、光の曇つたこまばかり考へて、こんな場合か知らんが、晴の場合に若し一つのボタンが新しい時のピカ／＼する光から少しでも曇つてゐたらそんなに悲しいだらうと思つたりした。そして幾日かの間はその思ひでその子は悲しかつた。

その次にお母様がその着物を着させた時に、その子は包紙をどれか取つて、本當にボタンが曇つてゐないだらうか、見たくてしやうがなかつた。教會へ行く途々にも激し

いさうしたい氣持が一杯であつた。けれどもお母様が繰り返し戒めたことを思ひ出したので思ひ止つて、着物を無事に着て歸つた。そして元のやうに綺麗に仕舞つて置いた。

さて、かうしたお母様がその着物を着るについて言ひ附けた掟は全部その子は守つた。必ず忠實に守つたのだつた。所が或不思議な晩のこま、その子は目を覺まして窓の外に輝いてゐる月の光を見た。その子にはその月の光が普通の月の光ではないやうに思はれてしやうがなかつた。またその夜も普通の夜ではないやうに思はれてしやうがなかつた。さういふ妙な確信を心に持つて、暫くの間その子はうき／＼してゐた。が暗に頻りに囁くものやうに思ひに思ひが次々重つていつた。

それから急に、その子はすつかり目が覺めてしまつてベッドの上に取り上つた。その時はもう心臓の鼓動が非常にせはしくて、體中、頭の上から爪先まで顫へてゐた。その子はもう心を決めてゐるのだつた。今こそあの晴着を本式に着るのださいふこみを自分で知つてゐた。それについて疑は少しも持たなかつた。が恐かつた、非常に恐かつ

た。けれどもまた一方、嬉しいこども非常に嬉しいのだつた。

その子はベッドから出て、しばし窓際に立つた。そして月の光を一杯浴びてゐる庭を眺めては、これから自分のするこゝを考へてみて身顛した。あたりは蟋蟀の小さい、高い啼き聲や、小さい生き物の低い啼き聲で一杯だつた。その子は家の人の目を覺さないやうに、そつこゝと廊下を進んで行つて、自分の晴着がしまつてある大きな黒い戸柵の所へ行つた。そしてその晴着を一枚一枚取出して、靜かに、しかも一生懸命になつてボタンを包んだ薄葉紙やその他の當を取りはづしてしまつた。するさお母様から初めて戴いた折に見た儘のきらびやかな晴着をなつた。

ボタン一つ疊つてゐるのではなく、絲一條色が褪せてゐるのではなかつた。その子は音をたてないやうに急いでそれを着た時、もう泣きたい程嬉しかつた。それからそつこゝ急いで庭に而した窓の所に歸つて、窓敷居の上に出る前にちよつこ其處に立つて、月の光に着物を光らせ、星のやうにボタンをきらめかした。それから出来るだけ音をたて

ないやうにして下の庭道に下りた。家の前に立つて見るこゝ、それは晝間見るやうに、白くはつきりさ見えた。そして自分の部屋の窓扉以外はぎの窓扉も眠つた目のやうに閉つてゐて、その壁には木が黒い靜かな影を投げつてゐた。

月の光に照らされた庭は晝間見る庭とは大變違つて見えた。生垣のあたりでは月の光が纏れてゐた。花さいふ花は白か、深紅な黒色に光つてゐて、空氣は蟋蟀の小さい啼き聲に震へてゐた。夜啼鴛は木の繁みに姿を隠して啼いてゐて、草や木の葉は虹色の露の寶石に蔽はれてゐた。夜は今までの夜よりも暖かく、天は何かの奇蹟によつて平生よりも大きくて同時に近く見えた。そして象牙色の月が世界を支配してゐるのに、空には星が一杯見えた。

その子は嬉しくて堪らなかつたが叫び聲も立てず、歌ひもしなかつた。彼は暫く怖けたやうに立竦んで、それから變な小さい叫び聲を出して、兩腕を差伸して、この圓い全世界を一度に抱かうとするかのやうに駈け出して行つた。

そして庭を眞直に通じた小道は進まないで、花壇や、濡れた丈の高い勾ひ草の中や、更に丈の高い花の中や、膝まで

來る廣く植えられた木犀草の中なぎを構はず進んで行つた
それから大きな牛垣にぶつかつて、それも構はず押し分
けて行つた。そして茨の刺に深い傷を受け、晴着の絲まで
切られたのだが、その子は少しも氣にしなかつた。かうし
たこども、僅れの晴着を着るこもの中だから承知してゐ
たので、氣にならないのだつた。その子は「僕は晴着を着
たのが嬉しい。こんなにして晴着を着てゐるのが嬉しい」こ
云つた。

生垣の向ふには池があつた。少くとも晝間は池であつた
所のものがあつた。けれども夜見るに、それは蛙の啼聲に
騒がしい銀の月光の大きな鉢であり、變な模様に燃られた
不思議な月光のそれであつた。その子はその水の中へ黒い
燈心草をかき分けて、膝まで、腰まで、それから肩までこ
這入つて行つた。彼の打つ水は黒き光の小波となり、その
中で空の無数の星が、岸邊に項垂れた木々の纏れた影の網
に掛つてゐた。

終にはその子は泳いだ。さうして池を渡つて向ふ岸に上
つた時には青浮草ではなくて、長い銀のリボンを滴るやう

に曳いてゐると思つた。それからその向ふ岸の刈らない草
の纏れを抜けて行つて息を切らして大きな道路に出た。彼
は「僕はこの場合に相應しい着物を着て来たこもがこても
嬉しい」こ云つた。

その大きな道路は矢のやうに眞直かつた。夜啼鶯の歌聲
の間を通じた白き光の路であつた。その路を彼はお母様が
あんなに手をかけて拵へて下さつた着物を着て、走つたり
跳んだり、また或時は歩いたり喜んだりして進んで行つた。
路は埃が深かつた。けれどもその子にこつてはそれは真白
い柔いものであつた。さうしてさつきに進んでゐる中に一
匹の大きな蛾が彼の濡れた微に光る姿の周に飛んで來た。
初めは彼はそれを氣に止めなかつた。がやがてそれを手招
きして、頭の周を飛び廻るその蛾ミダンスのやうなこもを
した。彼は「やさしい蛾だね、好い蛾だね。それに今夜は
素晴しいね、素晴らしい世界の夜だね。ねえ、お前は僕の着
物を綺麗だと思ふかお前の羽や、地球と空のこの銀の着物
のやうに、綺麗だと思ふ？」かこ彼は云つた。するに蛾は
段々こ近く飛び廻るやうにして、その天鷲絨のやうな羽を

微かに彼の脣に觸れた。さうして翌朝になるに、その子は石坑の中に落ちて、頸を折つて死んでゐるのだつた。そしてその美しい晴着も血が少し着いて、池から曳いて來たあの青浮草で汚くよごれてゐるのだつた。けれどもその子の顔は非常に嬉しさうな顔をしてゐた。若しあなた方がそれを御覽になつたら、あの冷い滴る銀は實は池の青浮草ださいふこもその子は知らないで、幸福に死んだのださいお思ひになつたでせう。

(をはり)

本園の歴史を語る初めの數章(口繪の四参照)

(一) 軸及び額

イ、開園當時の恩物手技

明治十年頃の附屬幼稚園幼兒を實寫せるもの

ロ、昔の幼兒の手技

織り紙、繻ひ紙、摺み紙、剪り紙の實物を貼りしもの

ハ、幼稚園保育の圖 明治二十年

武村耕露女史筆

ニ、幼稚園雙錄 明治二十九年

宮川春汀筆

(二) 圖書

幼稚園 幼稚園記 明治九年

(三)

幼稚園法二十遊嬉 明治十二年 恩物圖型 明治十八年
幼稚園通覽 明治二十六年
寫眞
附屬幼稚園最初の建物

明治九年創設期に於ける幼稚園職員

幼兒遊戲の圖 藤棚の寫眞 幼稚園職員 明治十七年

開設當時の觀察圖繪(五枚) — 衣食住の圖十二枚の中—

創設と共に附屬幼稚園縦覽室に掲げて幼兒に見せた繪

(四)

開設當時の幼稚園唱歌

幼稚園唱歌(手記) 唱歌の手記種々 明治九年より

小學唱歌集 明治十六年 幼稚園唱歌集 明治二十年

樂器の寫眞(和琴等)

(五)

手記

恩物大意 明治十二年 昔話 明治二十五年

保育法の筆記 創設當時

恩物數種

(六) その他

昔話 桃太郎 折本 明治二十九年

幼稚園畫學書 明治十二年

附屬幼稚園一覽等 明治二十五年